

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00388

研究課題名(和文)「日本」を語るオリエンタリズムと「民話」の「都市」・「資本主義」批判

研究課題名(英文)Orientalism and criticism of cities and capitalism in folk-tales

研究代表者

遠田 勝 (TODA, MASARU)

神戸大学・国際文化学研究所・名誉教授

研究者番号：60148484

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：劇作家木下順二の『夕鶴』を淵源のひとつとする、戦後の「民話」は、次第に「都市」・「資本主義」的価値観への批判的傾向を強めていくが、その近代日本批判をもっとも強く受け継いだ、松谷みよ子の「現代民話考」や、取材対象を戦場体験に拡大した辺見じゅんの「戦記文学」の誕生は、木下の創始した近代日本批判の「民話」の最終的到達点であり、そこに、日本を語る英語系オリエンタリズムに内在していた批判的視座が継承されていることを論じた。上記研究テーマのまとめとして、2023年10月、『「雪女」、百年の伝承 辺見じゅん・木下順二・鈴木サツ・松谷みよ子・そしてハーン』を、幻戯書房から256頁の単著・単行本として刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究のテーマは、ラフカディオ・ハーン等、明治の英米人によって英訳された、日本の伝説・物語などが、日本に逆輸入され、その他界・異文化描写が、日本の語り手たちに影響を与え、「民話」という、新文芸の創出に寄与したことを論証することである。その「民話」は、戦後、禁圧された国家神話に代わる、安全な「懐旧」「愛郷」の物語として歓迎された一方で、木下順二の登場によって、近代日本への批判的視座を組み込まれ、松谷みよ子の現代民話や、辺見じゅんの戦争文学へと受け継がれていく。本研究の意義は、その過程を、具体的民話の伝承と、オリエンタリズムの継承という観点から、文学的様式と思想の伝播として捉えたことである。

研究成果の概要(英文)：Japanese postwar folktales, some of which have their origins in “Yuzuru” by a young playwright called Junji Kinoshita, gradually became more critical of urban and capitalist values. “Contemporary folk tales” edited and written by Miyoko Matsutani and the new style of war literature by Jun Henmi who expanded her coverage to include battlefield experiences, were the final culmination of Kinoshita's criticism of modern Japan. Also, this is the place where the critical perspective inherent in the English-language Orientalism meets folk-lore criticism of modern Japan. I argued the theme in my book, “Yuki-Onna, a 100-year tradition - Jun Henmi, Junji Kinoshita, Satsu Suzuki, Miyoko Matsutani, and Hearn” published in 2023 as a 256-page single-authored book.

研究分野：比較文学

キーワード：ラフカディオ・ハーン 小泉八雲 木下順二 松谷みよ子 辺見じゅん 「雪女」 比較文学 英文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、英米系知識人のオリエンタリズムが、近代日本の言説に及ぼした影響について、これまでに得た、5件の科学研究費補助金(基盤研究C)による研究の結論として構想された。すなわち、平成16～18年度「オリエンタリズムの比較研究」、平成21～23年度「明治期ジャパノロジーにおけるオリエンタリズムの明暗」、平成24～26年度「オリエンタリズムと近・現代における日本の『伝統的』物語の創出」、平成27～29年度「『日本』を語るオリエンタリズムの誕生と近代日本における「民話」の創出」、平成30～令和2年度「『日本』を語るオリエンタリズムと「民話」のメディア展開 翻訳、方言、そしてアニメ」の研究成果によって、英米系ジャパノロジストたちの「英語」による伝統的物語の再話と、「民話」作家らの「方言」による再話には、機能的な同質性と歴史的な関連があり、「日本」を語るオリエンタリズムの物語がもつ「西洋近代」への批判的視座と、「民話」がもつ「都市」「資本主義」への批判的視座にも、同様に、機能的な同質性と歴史的な関連があると考察するなかで、本研究の着想に至ったのである。本研究では、近年の国内外で多くの成果を産み出した学術概念、「伝統の創出」「ナラティブ論」「オリエンタリズム」「メディアの越境」などを用いて、戦後の「民話」の批判的視座の獲得を、日本における英米系オリエンタリズムに特徴的な西洋近代への批判的視座を継承したものと見なすことも可能だと考え、歴史的・文学的にその可能性を考察した。近代日本の「民話」を英語文学と日本語文学の交流としてとらえる点で、また、「民話」の発展を、メディアの交代現象と関連づけて考察する点で、研究開始当初の状況である、従来の静的・閉鎖的な「民話」研究を打ち破るべく、文化人類学、民俗学、説話・神話研究とも異なる観点から、新たに、日本人と「ふる里」の物語の関係をとらえようとする点に本研究の特徴がある。

2. 研究の目的

本研究の重要な論点は二つある。第一に、ラフカディオ・ハーン等、明治期の英米系ジャパノロジストによって英語化された、日本の伝説・物語などが、日本に逆輸入され、当時、特権的・規範的な地位にあった学校「教科書」や「翻訳書」によって読まれたために、それら英語化された物語に潜む、リアリズムとサスペンスを基調とする近代西洋のナラティブと、オリエンタリズムに由来する世界・異文化描写が、日本の「伝統的」物語の再生に取り組む作家や語り手たちに刺激を与え、「民話」と呼ばれる、新しい地方の口承文芸の創出に寄与したことである。第二に、おおむね一九一〇年以降に創出・確立された「民話」は、第二次世界大戦後、禁圧された日本のナショナリズム・国家神話に代わる、安全な「懐旧」「愛郷」の物語として、一九五〇年代から爆発的に流行し、活字から舞台、テレビアニメへとメディアを超えて拡散し、高度経済成長を背景に「都市」・「資本主義」的価値観への批判的傾向を強めていくが、このような「民話」の批判的視座には、もともと日本を語る英米系オリエンタリズムの旧日本礼賛に内在していた、新日本及び西洋近代への批判的視座が、ほぼ同質・同機能のまま継承されていたことである。本研究は、以上の二点を、具体的作品を通じて、専門分野横断的に考察・検証したものである。本研究の目的の核心は、村落共同体において遠い昔から口承により伝えられてきたと信じられてきた「民話」が、実際には、近代西洋のオリエンタリズムという芸術形式とも接触しつつ、第二次世界大戦後の爆発的流行を経て、その語りの重心が「懐旧」「愛郷」から「都市」「資本主義」批判へと移るなかで、もともと「日本」を語るオリエンタリズムの旧日本賛美に内在していた、新日本および西洋近代への批判的視座が、戦後のマルチメディア化した「民話」にも継承されていたことを、具体的な作品の分析から学術分野横断的に論証しようというものである。

3. 研究の方法

本研究では、近年の人文学において多くの成果を産み出した学術概念、たとえば「伝統の創出」「ナラティブ論」「オリエンタリズム」「メディアの越境」などを用いて、一八七〇年代から一九八〇年代の百年を超える時間のなかで、「民話」の創出という、英語文学と日本語文学の交流現象を考察する。「民話」の研究は従来、文化人類学、民俗学、説話・神話研究などの学術分野内でおこなわれ、上記のような概念を複数組み合わせた研究は少なく、それらを戦後の日本の「民話」ブームと、マルチメディア的展開の分析に応用した研究はほとんどない。ここに本研究の方法論的な独自性と創造性がある。したがって、本研究の成果は、より広い学術研究、たとえば文化交流、ナショナリズム研究、マスメディア研究、アニメ研究にも波及効果が見こめる。本研究では、「民話」と近代西洋のナラティブおよびオリエンタリズムとの関係を考察するために、戦後「民話」の「都市」「資本主義」への批判的視座の獲得と、メディアへの展開を検証し、その転換を主導した木下順二とラフカディオ・ハーンの関係をとらえ、木下順二は、いうまでもなく戦後を代表する英文学者・評論家・劇作家であるが、その執筆活動のはじまりは、オリエンタリズムで脚色した日本「民話」の創始者であるラフカディオ・ハーンの研究であった。木下は、戦後、あらたに「民話劇」という芸術ジャンルを提唱し、みずから執筆・上演した『夕鶴』は、佐渡地方に伝わる単純な異類婚姻譚に、都市および資本主義批判を盛りこみながら、なおかつ、美しい郷土、懐かしい昔の物語という体裁を保つことに成功し、全国各地の公演で成功をお

さめ、学校教育現場でも歓迎され、後には多数の国語教科書にも採用された、「民話劇」の代表作である。この点、同じく異類婚姻譚の枠組みに近親相姦的な危険なロマンスを組み込み、なおかつ、日本の口承「民話」という体裁を「偽装」することに成功した、ハーンの「怪談」の傑作「雪女」に、その性質と構造が酷似していた。木下の「民話劇」「民話」再話の特徴は、単純素朴な物語に、鋭い社会批判、とりわけ、農村社会と対立する「都市」「資本主義」的な価値観への批判を盛り込んだ点にあるが、ハーンらの在日オリエンタリストによる日本の「物語」もまた、西洋近代への批判的視座を含んでいた。木下とハーンのつながりで、もっとも重要なのは、木下が旧制中学時代、高校時代と二度にわたり、長文のハーン研究を執筆していたことである。木下は、ハーンの「民話」のみならず、その旧日本礼賛と新文明への批判も熟読していたのである。しかし木下が戦後の文壇に登場したとき、両者の政治的思想的スタンスは正反対の位置にあり、木下がハーンへの言及をやめたために、両者の関係が学術的に論じられることは、これまでほとんどなかった。しかし、それぞれが「民話」の近代化に果たした役割には共通点が多くあり、主要な作品における影響関係がなかったはずがない。なかでも、「日本」を語るオリエンタリズムに内在した西洋近代への批判的視座の「民話劇」への応用は、もっとも重要な、そして、多くの成果が期待できる研究課題である。その木下の「民話」における批判的視座を継承・発展させたのが、童話作家、松谷みよ子である。松谷は、木下が主催した「民話の会」出身で、木下の門下生を自称しただけでなく、木下が「民話」に導入した「都市」「資本主義」批判を忠実に受け継いでいた。松谷の処女作『信濃の民話』は、「民話」は売れないという当時の出版界の常識をやぶり、ベストセラーとなって、演劇における木下とともに戦後の「民話」ブームを牽引した。松谷はまた、当時、放送を開始したばかりのNHK テレビに人形劇の脚本執筆、さらにはアニメーション映画への原作の提供なども行い、「民話」のマルチメディア化も先導した。したがって、その特徴的な語り口と木下から継承した批判的視座は、活字はもちろん、多くのメディアでの「民話」に踏襲され、その頂点となるテレビアニメ『まんが日本昔ばなし』に結実する。この人気長寿アニメ番組は、一九七〇年代半ばから九〇年代半ばまでほぼ二十年にわたり子ども向けに放送され、現代の成人の多くは、「口承」でも「書承」でもなく、いわば「視承」により、「民話」にふれ、「ふる里」のイメージを形成したのだが、この番組、あるいはアニメ化された「民話」と、現代のわれわれが抱く「昔ばなし」や「ふる里」の概念の関係は、学術的には手つかずのままである。しかし、この番組のなかで多用された人工的な方言や、人物・風景の単純な描線と色彩によるデフォルメ、世界の民族音楽を効果音や主題歌に取り入れる技法、そして、村落共同体への賛美と都市文明・資本主義的価値観への批判的視座は、明治のジャパノロジストラが創始した「日本」を語るオリエンタリズムにも散見する特徴で、両者の「血縁関係」をうかがわせるものである。こうした方法で、本研究が究極的に目指すものは、わたしたちが日常的に愛着する「郷土」や「昔」の物語の組成を確かめ、より複眼的で、かつ根源的な視点から、わたしたちの「愛情」・「信仰」と「物語」の緊密で深いつながりを考察することである。

4. 研究成果

上記研究テーマのまとめとして、2023年10月、『「雪女」百年の伝承 辺見じゅん・木下順二・鈴木サツ・松谷みよ子・そしてハーン』を、幻戯書房から単著・単行本として刊行した。本書でとくに焦点をあてたのは、ハーンから木下順二へ、そして木下から松谷みよ子・辺見じゅんへの現代民話作家への影響関係である。戦後を代表する劇作家で英文学者・評論家の木下順二は、あらたに「民話劇」という芸術ジャンルを提唱し、みずから執筆・上演した『夕鶴』は、佐渡地方に伝わる単純な異類婚姻譚に、資本主義批判を盛りこみ、なおかつ、美しい郷土、懐かしい昔の物語として人気を博した。木下とハーンには幾重ものつながりがあり、順二の父、木下弥八郎(中央開墾株式会社取締役)は、旧制熊本五高の第三回卒業生で、ハーンの直接の教え子であった。また順二自身も小学四年生から熊本に暮らし、中学時代すでに百枚ほどの「ラフカディオ・ハーン その研究」をまとめていた。旧制五高に進学してからはさらに本格的なハーンの伝記に手をそめ、これは後に『木下順二評論集』に収められ、今なお、ハーンの熊本時代についての必読文献とされている。その後、進学した東京大学英文科では、ハーンの著作や書簡集の出版事業の中心にいた市河三喜が教鞭をとっていて、当時の英文科研究室にはまだいたるところにハーンの影響が残っていたと推測される。したがって木下が戦後、『夕鶴』などの民話の芸術的再生に取り組んだ背後には、ハーンの影響がはっきりと見て取れるだが、戦後、進歩的左翼としてのスタンスをとった木下は、その頃、右派保守主義者として厳しい批判にさらされていたハーンの名前を自身の芸術との関連で語ることはほとんどなかった。木下順二とハーンの関係は、これまでハーン研究の側で、いくどか言及されることはあったが、本格的に論じられることはなかった。しかし、木下の経歴と、両者の代表作である「雪女」と『夕鶴』の構造上の類似を考えると、ハーンから木下への影響を否定することは難しい。その木下を中心に設立された「民話の会」には、戦後の民話研究と童話文学、そして民話のマルチメディア化に決定的な影響をおよぼした松谷みよ子がいた。松谷は、長野県安曇野で取材したという『信濃の民話』を出版し、民話は売れないという常識をくつがえし、大ベストセラーとなって、第一次民話ブームを引き起こすのだが、この民話集に収録された「雪女」は、現地の聞き取り調査で採集したものではなくて、机上でハーンの「雪女」を再話したものだ。つまり、ハーンの日本語訳に、いかにも「信濃っぽい」方言や山村ふうの衣装、仕草を加えて、自由にアレンジし書き直したものだ。この「雪女」のアレンジにうかがえる、松谷みよ子の民話の「語り」の特徴、つまり、近代小説のナラティブの

採用、現代（都市）文明への批判、過去や辺境・異界への憧憬、エキゾチックな方言・仕草・衣装の利用などは、ハーンも常用していたオリエンタリズム的「異境の物語」と共通する技巧だった。松谷はその後、NHK テレビでの人形劇、アニメへと活躍の場を広げ、民話のマルチメディア化は、一九七〇年代半ばから九〇年代半ばまで放映されたテレビアニメ『まんが日本昔ばなし』で頂点を迎える。ここに使われた人工的な方言と、人物・風景の単純な描線と色彩によるデフォルメ、世界の民族音楽を効果音や主題歌に取り入れる技法、現代社会への批判的視座と異世界への憧憬は、明治のジャパノロジストらが創始した「日本」を語るオリエンタリズムの最終的な進化形とみなすこともできる。この研究のはじまりは、ラフカディオ・ハーンの「雪女」がどのように誕生したのか、その材源の調査だった。ハーン(1850 - 1904) は、ギリシャ生まれのイギリス育ち、20歳のときアメリカに渡り、アメリカ南部のルポルタージュや仏領西インド諸島の紀行文によって作家として認められた。1890年に来日。島根県松江や熊本で英語教師をつとめ、知られざる日本を美しい英語で世界に紹介した。のち、小泉節子と結婚し小泉八雲と名乗り、日本国籍を取得。晩年は東京帝国大学で英文学を講義しながら、「怪談」の再話に没頭し、世を去る1904年に *Kwaidan* (『怪談』) を出版した。ハーンの最高傑作のひとつといわれる「雪女」は、ここに収められている。その材源の調査の結果は意外なもので、「雪女」という物語は、実質的には日本の断片的口碑を利用しただけの、ハーンの創作であることがわかった。民話「雪女」がハーンを淵源としているとわかれば、その流行の跡は追いやすい。もとにあるのは明治末に出版された一冊の英語書籍だから、たどるべき流れは数もかぎられていて、またその間の時間も、わずか百年ほどしかない。その痕跡をたどると、まずあまり出来の良くないあやしい邦語訳の出版、そして白馬岳の「雪女」という土着の山岳伝説への翻案、松谷みよ子による口碑風の再話へとつづいている。この間の伝承は、活字から活字への伝承、つまり完全な机上の書承であって、表向きは口承民話のように装われながらも、実際にフィールドで採取されたものは一話もなかった。しかし、ここから先、さらに不思議なことがおこる。おりからの民話ブームもあって、「雪女」は日本各地の土地の方言で民話として語られるようになるが、やがて遠野の有名な語り部・鈴木サツにひろわれ、昔語りとして、今では消えてしまった古い遠野方言で語られていたのである。その記録は音声で、そして後には、困難をきわめた翻字により、活字でも残されている。この見事な、そして不思議な変貌が意味することは重大である。わたしたちは一般的に、口承と書承を別の系統として、あるいは口承から書承へという「進化論」的な発展として考えているが、現実には口承と書承の交代はもっと頻繁に、かつ時代（とくにマスメディア）の受容と供給に応じて、作家の語りたという欲求によって、きわめて柔軟に行われていたのである。この「雪女」の伝承論は、原拠からわずか百年の流行をたどっただけの「短期」の考証だが、それでも、これだけ意外な転成が生じていたのである。国字誕生から千年を超える歴史を振り返ったとき、どれほどの数の民話が口承と書承のあいだで生々流転を繰り返してきたのだろうか。もうひとつ、本研究で考察したのは、語り手たちの、語りた、語らざるをえないという文学的欲求である。創造への欲求、創作への欲望といいかえてもいいが、柳田民俗学がこの問題を回避しがちであるのに対して、「雪女」の伝承においては、再話の根本的な原因・動機として強く働いていた。それがなければ、そもそもハーンの「雪女」が誕生していなかったはずだし、松谷みよ子の童話「雪女」も生まれず、鈴木サツによる遠野の昔語りもなかったのである。この芸術的創造性を民話の世界で正面から肯定し、自身の創作においても、いかに発揮したのが木下順二である。木下の戯曲『雪女』は、木下の創始した「民話劇」ではなく歌舞伎用の台本であり、その執筆は、名優六代目中村歌右衛門たっての願いによるものであった。この戯曲は、歌右衛門ほか豪華配役で上演され、それなりの評判をえたが、しかし木下自身は出来が気にいらず、全集・作品集はもちろん単行本にも収録しなかった。熱心な歌舞伎ファン以外にはほとんど知られていない。先に触れたように、木下順二はハーンと縁の深い人で、木下が戦後、民話劇『夕鶴』をもってはなばなし文壇にデビューし、その後、数十年におよぶ民話ブームをひきおこした背後には、ハーンの影響があったはずなのに、戦後の木下は、ほとんどハーンに言及しなかった。この謎めいた二人の関係を考えるために、わたしはまず木下の『夕鶴』とハーンの「雪女」の比較をした。つぎに、歌舞伎『雪女』の成立過程を調べ、ハーンの「雪女」が原拠としてどのように利用され、どう改変されたのかを指摘したうえで、歌舞伎『雪女』の成立とその後の「隠蔽」には木下のハーンへの強い対抗意識がうかがえること、また、その対抗意識のなかで、ハーンの木下への影響を考えるべきだろうと結論した。辺見じゅんは、『男たちの大和』や『収容所（ラーゲリ）から来た遺書』などで知られる現代のノンフィクション作家であるが、民話作家としても重要な業績を残していた。代表作『愛の民話』に描かれたのは、その多くが、日本の各地につたわる非業の死と甲われなかった怨霊たちの物語だった。その文学デビューから一貫して鎮魂と慰霊の語り手だった辺見は、民話の再話においても思い切った実験をしていた。それが辺見の生まれ故郷富山の「十六人谷」伝説で、辺見はこの伝説の後半にこっそりと「雪女」を取り込んでいた。こうして辺見は平凡な樹霊のたたり話を、人間の性愛の深淵がのぞく恐ろしい「怪談」に仕立て直したのである。これは「雪女」の民話化であると同時に、民話の「雪女」化でもあった。民話「雪女」は、全体としては、百年にわたる伝承のなかで、ハーンの前話をもつ「雪の女王」的性格や母性神的特徴が失われ、女神に誘惑・翻弄される男のマゾヒズムも消えて、狐女房や鶴女房のような温和な異類婚姻譚に近づいていくのだが、辺見じゅんは、当時の民話ブームの中心にいた松谷みよ子のこれ見よがしの童話化を拒み、また旧伝承にまわりついていた通俗的な扇情表現も取り去って、ハーンの前話から強烈な口マン主義のみを抽出し自作に移植していた。これら日本化

した様々な民話からハーンの「雪女」を逆照射してみると、ハーンの原作に隠されていた危険な性愛の側面が見えてくる。ハーンの「雪女」は、表面上、母性の神話化が目立っているが、その内側には危険なラブ・ロマンスも潜んでいた。若く美しい「母」への禁忌的な愛情を、物語の内側に封じ込めること。子供を捨てる母親の悲しみを、その身勝手な冷酷さとともに、神話として語り直すこと。それが「雪女」という、言いようのない悲しさと美しさを堪えた物語のひとつの側面ではないかと、わたしは思った。ハーンの「怪談」は多かれ少なかれ、そうした自伝的告白の要素をもつものだが、この「雪女」についていえば、彼が長く胸底に秘めていた傷跡と愛情が、素直に語られているのではないか。雪女という異国の伝承の「仮面」をかぶることで、実世界のモラルから解放されて、心の内奥の声を素直に物語った作品なのだと思う。だからこそ、ハーンは、それが自身の創作であるにもかかわらず、「これは武蔵の国の調布という村の農夫から聞いた物語である」と、作品集の冒頭に断り書きを入れたのかもしれない。もともと、そうしたエキゾチックな韜晦こそが、*Kwaidan* という書物の、そして Lafcadio Hearn という作家の生涯の戦略だったからである。そのほか関連する 4 つの講演をおこなった。芦屋市立公民館において、2021 年市民大学夏季集中「比較文化講座」の一環として「小泉八雲と国境を越えた日本の昔ものがたり」という題目のもと、第 1 回は「妻節子との出会いまで 明治の国際結婚と国際文学の誕生」(8 月 9 日)、第 2 回は「亡き母と父の和解をねがって 「破られた約束」「お貞の話」「和解」を読む」(8 月 23 日)、第 3 回は「名作「雪女」はどこから来て、なにを残していったのか? 「雪女」の誕生とその「子ども」たち」(8 月 30 日)を実施した。また 2023 年 4 月 24 日には、芦屋川カレッジ大学院において、「小泉八雲と日本のこころ」の講演を実施した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 遠田勝
2. 発表標題 「小泉八雲と日本のこころ」
3. 学会等名 芦屋川カレッジ大学院
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 遠田勝
2. 発表標題 「小泉八雲と国境を越えた日本の昔ものがたり」第1回「妻節子との出会いまで 明治の国際結婚と国際文学の誕生」
3. 学会等名 芦屋市民大学夏季講座「比較文化」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 遠田勝
2. 発表標題 「小泉八雲と国境を越えた日本の昔ものがたり」第2回「亡き母と父の和解をねがって 「破られた約束」「お貞の話」「和解」を読む」
3. 学会等名 芦屋市民大学夏季講座「比較文化」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 遠田勝
2. 発表標題 「小泉八雲と国境を越えた日本の昔ものがたり」第3回「名作「雪女」はどこから来て、なにを残していったのか？ 「雪女」の誕生とその「子ども」たち」
3. 学会等名 芦屋市民大学夏季講座「比較文化」
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 遠田勝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 幻戯書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 「雪女」、百年の伝承：辺見じゅん・木下順二・鈴木サツ・松谷みよ子・そしてハーン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------